

天地開闢てんちかいびやくと神明しんめいの顕現けんげん

— 記紀別天神傳承の神学 —

國學院大學名譽教授

上田賢治

人間の宗教的営み、それが自覺的に當まれる方向への契機となるのは、心理学者や社会学者による調査研究の示す所、千差万別で、その条件とか契機とかを特定することは出来ない。しかし、その特定個人の置かれた自然・社会・家庭環境の中で、自分自身が一体何者なのかという問いに直面せざるを得ない状況に置かれた時から始まり、永い葛藤期間を経て、見えてくるもの、自己一己を超えるものとの出会い、それは特定の個人や状況を超えた神、或いは佛ほとけ、真理、存在の理法、運命等々、それを受け容れて生きようとする姿勢のほぼ定まった時に形成される生きる事への姿勢によって決定される、と言つて良いのではないだろうか？ そのような人間が人間として生きる事に指針となる価値の根源、それは本来、非人格的な或るものとも言えるが、信仰生活を営むに至る者たちにとっては、自おのずから人格性を備えた精神的実在としての姿を持つ事が多い。何故なら、そうなる事によって、人格と人格としての關係を持つ事が可能となるからである。そうした信仰対象を日本人は、知られるわが国の歴史の初めから「カミ」の語を以て表現して来た。しかし、この純粹な大和言葉やまと、信仰の営みにとつて中核的な意味を持つ信仰対象を表す言葉は、その真意を傳承する上で、再度に及ぶ不幸・危機の歴史を持つ命運さだまに晒さらされて来た。最初のそれは、中国から儒教が伝わり、神道の信仰対象を表すカミが「神しん」の字で表記されるようになり、概念内容に大きな混乱が生ずる結果を招

来した事実があるからである。儒教に於ける「神」は、儒教そのものが、孔子という極めて理性の卓越した人格によって説かれた教えであり、人間の限られた理性によって把握し難い存在の理法、それを「天」、後には人格化された天帝とも呼ばれるようになるが、何れにしても、人間の願いによってその意思を左右し得る存在を意味しては居なかつたからである。しかしこの様な概念的な錯誤については、幸いに第四十三代元明天皇・和銅五年（AD七一一）に『古事記』が編纂され、わが国独自の古伝神話を、漢字を用いながらも、日本語によって記録化する営みが成就し、誤解の生ずる危険性も亦、基本的には除去されたと考えられる。即ち神は、儒教的な意味に於ける「思議すべからざるもの」としてではなく、霊的な働きとして、我々及び存在世界一般の存在夫々が示す働き（人間の場合は、それを魂の語で呼ぶ）のうち、特に優れた働きを持つ霊的対象を意味していたのである。しかし、明治に入つてキリスト教の聖典、イエスの出会つた罪の赦しと復活を与える創造主を、「神」の語を用いて表現する事が始められ、日本民族の信仰認識には、再び決定的な混乱が誘発される結果を招来した。今日と雖も、我々は神の語を口にする時、聞き手が何を理解の枠組みとして先有しているのかを確認して置かなければ、正確な意味伝達が不可能である事を、自覚して置く必要があるだろう。筆者が『古事記』を基本とし、『日本書紀』を対照原典として、神道の根本的思惟の体系、及び価値指向性を明らかにしたいと考える理由も亦、此処に在る。

○更に一言断つて置きたいのは、「カミ」という言葉の語義論についてである。国語学者達がその原義を明らかにしようとする努力は、これを多としなければならないが、信仰的営みは、これを一義的に規定された語義によって制約されるものでは在り得ない、とするのが、筆者の宗教経験を中核に置く神学的姿勢から出て来る理解で、「カミ」の語は寧ろ古典の用法をこそ基本とすべきだと、考えている。その意味では、本居宣長による「世の常ならず優れたることの在りて畏きもの」とする理解を、ここでは採用して置きたい。

さて、我が民族にとつて古典中の古典である『古事記』及び『日本書紀』本段は、夫々次のような言葉で語り始め

ている。即ち「記」は、

天地初発之時。於高天原成神。名天之御中主神。次高御産巢日神。次神産巢日神。此三柱神者。並獨神成座而隱身也。次國稚如浮脂而。久羅下那州多陀用弊流之時。如葦牙因萌騰之物而成神。名字摩志阿斯訶券備比古遲神。次天之常立神。此二柱神亦並獨神成坐而隱身也。上件五柱神者。別天神。(記・紀原文は、国史大系本に拠る) あめつち初めておこりし時。たかまのはらになりませる神。み名は、あめのみなかぬしの神。次にたかみむすひの神。次にかみむすひの神。このみはしらの神は。ならびにひとりかみなりまして、かくりにます。次に國わかくうきあぶらのごとくして、くらげなすただよえりし時。あしかびのごと、もえあがるものによりて、なりませる神。み名は、うましあしかびひこじの神。次に、あめのとこたちの神。このふたはしらの神もまた、ならびにひとりかみなりまして、かくりにます。かみのくだり、いつはしらの神はわけあまつかみ。これに対して「紀」は、次のように述べている。

古天地未剖。陰陽不分。渾沌如鷄子。溟滓而含牙。及其清陽者薄靡而為天。重濁者淹滯而為地。精妙之合搏易。重濁之凝場難。故天先成而地後定。然後神聖生其中焉。故曰。開闢之初。洲壤浮漂。譬猶游魚之浮水上也。于時天地之中生一物。状如葦牙。便化為神。號國常立尊。次國狹槌尊。次豐斟淳尊。凡三神矣。乾道獨化。所以成此純男。

いにしえ、天地みばん、陰陽ふぶん、渾沌として鷄子のごとく、溟滓して牙を含めり。その清陽なるものは、たなびくにおよんで天となり、重濁するものは、淹滯して地となる。精妙にして合うは搏ぎやすく、重濁するは、凝りかたまりがたし。故に天まず成つて、地、後にさだまる。しかるのち、神聖その中に生ず。故に曰く、かいはやくのはじめ、くにつちうきただよい、たとえばなお、ゆうぎよの、水上に浮かべるが如し。時に天地の中に、いちもつをしようず。かたち葦かびの如し。化して神となる。名は、國とこ立ち尊。次に、國さづち尊。次

に、とよくむぬ尊。すべてさんじん。けんどう、とつくわ。ゆえに、かくじゅんなんとなる。

○筆者は、『古事記』の場合、漢字を用いながらも、(勿論、この時まで、和字は創作されて居ない)自国の口承伝承を、覆滅に至らしめる事を懼れた朝廷が主導して、大和言葉で読めることを条件に、記録として残されたのであり、事実、成立当初から、大和言葉で読まれていたに相違ないと考えている。従って筆者は、神名についても、敬語表現で読むべきであると考えている。これに対して、『日本書紀』の場合は、中国・朝鮮半島の知識人達が読むことをも意識して、編纂されたのに違いないのである。従って、そこには異国人への政治的・文化的配慮が必要で、何故、『古事記』に次いで、短期間の間に、自国の文化伝統と歴史とについて、書式の異なる二書を編纂したのであるのかの疑問も亦、こう考える以外に、納得し得る筋道は無いと考えているのである。この事実は、先に示した『日本書紀』の本文劈頭の部分、即ち「古天地未剖。陰陽不分。渾沌如雞子。溟滓而含牙。及其清陽者薄靡而爲天。重濁者滯滯而爲地。精妙之合搏易。重濁之凝塊難。故天先成而地後定。然後神聖生其中焉。」の部分、中国・後漢時代、淮南王の書『淮南子』から借用された開闢伝承である事によって明らかである。中国人は『古事記』を読む事は出来ないが、『日本書紀』は読めたのである。繰り返しになるが、『古事記』の編纂された僅か八年後に、何故「書紀」を編む必要が在ったのか？ その背後に、単に政治・軍事的脅威のみならず、同時に文化の面でも多くを学ばなければならなかった当代日本の状況が推察出来るのでは無いだらうか？ 「紀」は当然、当時の政治に携わった官僚達の為に、講書始めの儀に当って講読されたのである。筆者が「書紀」の読み方について、従来の訓み無視、出来るだけ漢文調の読みを試みたのも、当時の歴史事情を考えただけからに他ならない。この問題については、筆者も深重を期し、『日本書紀』研究の権威である國學院大學名誉教授・中村啓信博士に教えを乞うた。氏は、決定的な事は言えない。両説、つまり筆者のような考え方も在り、反対の説、つまり今日、我々が普通に読んでいる訓読み説もあり、断定は出来ないが、平安初期の文献(写本Ⅱ何かの本を筆写したもの)では、既に訓読みである

から、奈良時代でもそうであつたらうとされた。しかし筆者は、敢えて熟語の場合、出来るだけ音読みを採ることとした。

上に引用した記紀冒頭部分の伝承に、我々は日本人である我々の祖先が感じ取つて居た現存在世界（自然）と神明（カミ）との認知を、共に見出す事が出来る。先ず第一に問題としなければならぬのは、天地自然に、その初めが在った事を認知しながらも、それが如何なる力によつて生成されたのかを、両書の伝承共に、問うてはいないという事実であり、これに注目しなければならぬ。何故なら、これはユダヤ教・キリスト教・イスラムという絶対的一神の信仰を持つ宗教が、その出発点として持つ、ヘブライの伝承、俗に旧約（約は、神と人との契約の書という意味で、イスラエルの民が聖書とするのは、かつての族長モーセを中心として伝承された神との契約に繋がる諸伝承を意味し、イエスを神の子・人間の直接的な救済主とする教への信仰者達が、信仰の典拠とする諸伝承を、ユダヤ教と區別して、新しい約束の書という意味で、彼等の信仰典拠としたのが、新約と呼ばれるようになった）と呼ばれる書の第一に置かれる「創世記」に伝えられた次のような言葉、即ち、

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であつて、闇が深淵の面おもてにあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ」。こうして、光があつた。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があつた。第一の日である。神は言われた。「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があつた。第二の日である。神は言われた。「天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。」そのようになった。神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神はこれを見て、良しとされた。神は言われた。「地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、

地に芽生えさせよ。」(中略) 第三の日である。(中略) 神は二つの大きな光るものと星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。(中略) 第四の日である。(後略) 「ヘブライ語聖書対訳シリーズ 1・『創世記』・第一章第一節～第十九節・ミルトス・ヘブライ文化研究所編」。

という伝承と比較して見れば、その相異は歴然としていよう。それは、現実存在世界の存在一切が、何者かによって造られたと発想するか、それが所与のもの(初めから在った)であると理解するのかの相異である。これは『古事記』・『日本書紀』が、共に神を「ナル」という表現か、「生まれる」と言う表現かで語っている事によって、一層明白な認識を我々に提供して呉れている。我々の信じて来た神々は、必ず先立つ現実存在としての物実ものざらから生まれるか、或いは物実から自己顕現して居られるのである。つまり、ユダヤ・キリスト・イスラムの三教が、天地という現実存在世界が存在する以前に、彼等の信仰するヤツハヴェイロゴッドが存在し、その神の言葉によって、我々の知る現存在世界の一切が、何の素材(物実ものざら)をも介在させる事なしに、完全無の空間に、人間を除く現実存在世界の一切を、先ず出現させたという信仰を表明しているという事実である。それは引用後半の言葉「光あれ」。こうして、光があった。」によって、一層明瞭なものとして認識されるであろう。これに対して、神道の場合には、「記」が天と地の先在から説き始めているのに対して、「紀」が天地未分の一物を前提として語り始めてはいるが、共に現存在世界が神に先行して説かれていた点で、共通しているのである。物実無しに靈を語ることが無いという事実は、神道の特色として銘記されなければならないであろう。先取りして言えば、超越的一神を信ずる宗教が、初めなく終りの無い絶対者、現実存在世界とは全く異質な神の居ます世界、即ち神の国に、信仰によって、死後に導かれ、永遠の命を得ようとする信仰を、その中核として展開しているのに対して、神道が、死者・祖霊が、我々の住む同じこの現実存在世界に、祭りによって来臨現在されるといふ信仰を展開して来た事との相異が、この神理解に於いて、明確に提示されて居るからである。

○我々は、キリスト教の天地創造神話を、創造という言葉によって表現して来た。しかし、これは誤った翻訳であり、誤解を生ずる原因ともなっている。何故なら、漢字の「創」も「造」も、実は同義の語であつて、ある存在を前提として、それから何かそれ迄に現実存在としては存在して居なかつた新しい存在形態を造り出す事を、意味する言葉なのだからである。日本人の神觀念が混乱して居る事実を批判、或いは非難する事はたやすいが、その責任は寧ろ、異質な信仰を持ち込み、原語による布教を怠つた側に求められよう。更に一言して置かなければならないのは、「紀」が天地未分の「一」なるもの「古天地未剖。陰陽不分。潭沌如雞子」と述べている事、換言すれば究極的な「一」を発想していると言う事実についてである。これは既に触れた通り、中国の書『淮南子』から借りたものであり、わが国固有の伝承では無かつたのである。「記」と異なるのは当然の事と言わなければならぬ。因みに仏教の現実存在世界についての考え方についても触れて置くと、それは、一般にもよく理解されている因果の理法で考えなければならぬ。つまり、現実には何かが存在していると言う事は、その原因を遡つて行けば、永遠の過去、未来も亦、無限という事になる。現実存在世界は、生々流転する存在なのである。

○現実存在世界を考える場合に、古典が「天地」と言う熟語を用い、天を先に置いて居るのは、不思議と言えば不思議である。しかしこの事實は、人類普遍の発想であるとも言ひ得よう。それは未知の世界であり、風雨雷鳴、四季の変化を通じて、地上生活に決定的な意味を持つ働き源体であるからであろう。宗教的営みが、この問題から考へ始められたのも亦、自然な事だと考えられる。仏教がこの天と無縁であるように思われるのも、一つの特色ではないだろうか？ 釈迦は個人自らの人生苦から解放される事を願つてシヤカ国を捨て、妻子をも捨てた人だったのであるから。

○『古事記』が神の顕現を「成」の語と字で表現して居る事について、一言して置きたい。筆者はかつて自著『神道神学』で、本居宣長が神の生成について「成る」の三用法を挙げ、その第一に「無し物の生り出るを云（人の産

生を云も是なり」として居る見解を批判した。当時の筆者は、無を文字通り無と理解していたが、国語学者でもあつた宣長が、未完成な状態の胎児が成熟して出生する意味でこの語を例として挙げたのだとすれば、国語文法上の誤りだとは言えない事を、筆者も最近、知り得たからである。「なる」という日本語には、そのような用法が在るという事なのである。

○ここで、キリスト教よりは遥かに古い時代から日本人の信仰に深く入り込んで居る仏教の佛について、少し触れて置く必要があるだろう。仏教の開祖ゴータマ・シッタータの生存時代（根本仏教）からその直弟子時代（原始仏教）の根本的な教えは、今日、三法印（仏教が仏教であることを保証する為の指標）と呼ばれて居る言葉によって説明されている。それは以下の三箇条である。即ち諸行無常・諸法無我・一切皆空と言う。諸行は、一切諸々の現象、それは常、即ち変わらぬという事は無い。諸法は、一切の存在。それは不変不動の本質を持つものではない。従つて、この世に永遠不変なるものとして頼るべきもの無しと教え、その理法に自らを一体化する以外、救いは無い、と説いて居るのである。凡百の煩惱に沈淪している凡夫にとつては、余りにも厳しく近寄り難いという事で、後に大乘仏教徒によつてヒナヤーナ（小さな乗り物・小乗）と名付けられた。釈迦自身、六年に及ぶ苦行を経て煩惱から解脱したとされる。それを成仏と言う。日本人が死んだ人に「成仏して下さい」と言うのは、死者が最早煩惱の無くなった状態に在るからに他ならない。その理法を造形化し、礼拝の対象として佛画・仏像として庶民に心の拠り所、安心を与えたのがマハヤーナ（大乘）仏教で、わが国に伝えられた仏教は、この流れに属する諸宗派である。礼拝対象である仏が、神と如何に相違するもので在るかは、歴然としていよう。しかし宗教一般について言えば、具象化された対象を通じて、その宗教の求める信仰内実への接近・同化を企図するのは、略共通の営みとして認められる在り方で、これを「偶像崇拜」の名で批判することにも、問題が残らう。キリスト教が仲保者としてのイエス像、或いはマリア像、そして最も理念化された形では、十字架を通じてそれを行い、そして神道が

鏡を通して、宗教としては同質の営みをしていいるからである。

○根本仏教が変化にマイナス価値を置いているのに対して、神道がそれを生成発展として肯定的に把らえている相異も、意味のある相異として考えられなければならないであろう。

○キリスト教の聖典は、バイブルの名で呼ばれるが、元はヘブライ語でビブル、書物という意味である。英語に翻訳されてからも、ゴッドに冠詞(aとかan、又はThe・the)を付けないように、バイブルにも冠詞を付けずに来て居る。これは、書物と言うべきはこの書物、つまり書物中の書物という意味が込められて居るのである。ゴッドも亦、このゴッドしか居まさぬという信仰から、冠詞を付けるのは誤りだとされる。所がわが国では、総てのホテルにバイブルが置かれ、タイトルは金文字で聖書とされているだけでは無く、テレビ・ラジオ・新聞・週刊誌を問わず、知識人の総てとさえ思われる程の知識人が、クリスチャンではない場合でも、これを聖書と呼んでいる。日本で布教した司祭・牧師たちが普及させたと思われるのだが、情けない事に、ここにも日本人の宗教音痴ぶりが発揮されて居るように思えて、筆者はただ嘆息するばかりである。聖書と言う為にはホーリーの語が必要であること、信者でも無い者が聖書と称するのは、宗教冒瀆である事をここで、明瞭に自覚するよう、注意を喚起して置きたい。

「書紀」のこの段に挙げられた一書群についても触れて置かなければならない。

一書曰。天地初判。一物在於虚中。状貌難言。其中自有化生之神。號國常立尊。亦曰國底立尊。次國狹槌尊。亦曰國狹立尊。次豐國主尊。亦曰豐組野尊。亦曰豊香節野尊。亦曰浮經野豊買尊。亦曰豊國野尊。亦曰豊嚙野尊。亦曰葉木國野尊。亦曰見野尊。

いっしよにいわく。てんちのしよばん、いちもつ、きよちゆうにあり。じようぼう、言いがたし。その中に、お

のづからカセイのカミあり。クニトコタチソンとごうす。また、クニソコタチソンと言う。次にクニサツチソン、またクニサタチソンと言う。次にトヨクニヌシソン。また、トヨクミヌソンと言う。また、トヨカブシノソンと言ひ、また、ウキツヌトヨカイソンと言ひ、また、トヨクニヌソンと言ひ、また、トヨクイヌソンと言ひ、また、ハコクニヌソンと言ひ、また、ケンヤソンと言う。

○ここに挙げられた豊國主尊については、七つの別名が挙げられているが、「書紀」の一書は、本来、諸国の首長が伝える所を列記したものであるから、同一神と考えられる神について、これ程の異名も生じ得たのだと考えられる。

一書曰。古國稚地稚之時。譬猶浮膏而漂蕩。干時國中生物。状如葦牙之抽出也。因此有化生之神。號可美葦牙彦舅尊。次國常並尊。次國狹槌尊

いにしえ、クニわか、チわかき時、たとえば、なおウキアブラのごくして、ヒョウトウす。ときに、クニナカにモノしようぜり。かたちアシカビのごとくして、ヌキいでたり。これによりて、カセイせし神、ウマシアシカビヒコジソンとごうす。次に、クニトコタチソン。次に、クニサツチソン、と。

○この伝承は、「古事記」伝承に近似するものと言ひえよう。

一書曰。天地混成之時。始有神人焉。號可美葦牙彦舅尊。次國底立尊。

てんち、こんせいの時、はじめにシンジンあり。ウマシアシカビヒコジとごうす。次にクニソコタチソン。

○「神人」と言う表現は、いかにも儒教の「神」を意識した表現で、地方豪族の中には、この様な表現で、歴史事実との調和、合理化を発想していたのではないだろうか？。

一書曰。天地初判。始有俱生之神。號國常立尊。次國狹槌尊。又曰。高天原所生神名。曰天御中主尊。次高皇産靈尊。次神皇産靈尊。

てんちのしよばん、はじめに、グシヨウのカミあり。クニトコタチソンと、ごうす（名づく）。つぎにクニサツ

チそん。また言う。タカマガハラしよせいのしんめい、アメノミナカヌシそん。つぎに、タカミムスヒそん。次にカミムスヒそん。

○俱生は、共に生まれるの意味。この伝承は、地方伝承に皇室伝承が混交して居る事実を表わして居る。

一書曰。天地未生之時。譬猶海上浮雪無所根係。其中生一物。如葦牙之初生渥中也。便化爲人。號國常立尊。てんちみしようの時、たとえばなお、かいじょうのフセツ、根かかる所なきがごとし。そのなかに、いちもつし
ようず。アシカビのでいちゆうに、しyouずるがごとし。すなわち、化して人となる。クニトコタチそんとう
す。

○この一書にも、「古事記」的表現の伝搬を感知する事が出来よう。

一書曰。天地初判。有物若葦牙。生於空中。因此化神號國常立尊。次可美葦牙彦舅尊。又有物若浮膏生於空中。因此化神號國常立尊。

てんちのしよばん、モノあり。アシカビのごとし。くうちゆうにしようず。これによつて化す神、クニトコタチ
そんと號す。次にウマシアシカビ・ヒコジそん。また、物あり。うきあぶらのごとくして、くうちゆうにしよう
ず。これによりて、神と化す。クニトコタチそんとうこうす。

○葦や浮膏が空中に生ずと言うのは、如何にも奇妙だが、伝承というものは、その口伝えの途上に、この様な不作為
の変容が生ずる事も避け難いのが、歴史の事実なのであろう。